
いつまでも続く、俺の日常

目次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつまでも続く、俺の日常

【Zコード】

Z0397E

【作者名】

目次

【あらすじ】

ちょっと不思議な力を持つ少年神楽祐一。彼の力は凄く強大なはずなのに本人はあまり関心のないようす。そんな彼が実家の御家騒動に巻き込まれて行く……？

またこつもの日々（前書き）

皆様初めまして。

ダラダラと書き連ねておりますが、日を通して頂けると嬉しいです。

またこつもの日々

「兄さん。朝ですよ」

「う……」

俺はゆるりと体を揺する手を払いのけ、田原時計に手を掛ける。
時間は午前七時。

もつ起きなければ学校に間に合わない。

「ん？」

そう、学校に間に合わない。

「う……遅刻……！」

「あやつ……！」

急いでベッドから飛び起も、一息で寝間着を抜き捨て下着一枚に。

「うよ……兄さんつ……！」

声のした方を振り向くと、耳まで真っ赤に染めた尚香が立っていた。

「あい……おはよ

俺はそんな尚香に優しく声を掛ける。

「もう少しだけ待ってますから…」

尚香は俺から逃げる様に部屋から出て行く。

はて？何で起こうとしているのだろう？

一瞬そんな疑問が頭に浮かんでは消えた。

楽しかった春休みも昨日で終りを告げ、今日からまた学校が始ま
る。

俺はそんなことをすっかり忘れていて、危うく寝過ごす所だった。

「おはよう

制服に着替えた俺は改めて義妹である尚香に声を掛ける。

「おはようございます」

尚香は制服にエプロンと奇妙極まりない格好で台所に立っている。
尚香は本当の妹ではない。俺達の両親は再婚で、俺は母の尚香は
父の連れ子だ。だがそれも俺が小一、尚香が幼稚園の時とお互い小
さかった事もあり柵等は一切ない。

で、当のバカ親共はといつじ。

「尚香も高校生になつたことだし、一人暮しなんてどうへん。

なんて言い出し、今はこの状態。

もう支離滅裂。

だし。の意味もわからない。

とは言え本質は何の変化もない。出て行つたのは親の方なのだ。
今頃、Bielbyの辺りでようしきやつているだろう。
あつ。Bielaの邊りでいつて言つのは、ヨーヨークの事ね。

「兄さん誰と話してるんですか？」

いかんいかん。口に出ていたようだ。
所で……

「一ついいか？」

「何ですか？」

「どうしたら、パンがこんなに真つ黒になるんだ？」

テーブルに食事を並べていた尚香の手がピタリと止まる。もう食事かも微妙な所だが。

もうわかつて貰えたと思つが、ここつは料理が全く出来ない。いや、全然出来ない。壊滅的に出来ない。

「兄さん。聞こえます」

顔に青筋を走らせた尚香がにやりと笑ひ。
どうもこの癖は間が悪いな。

それに尚香の笑顔がとっても怖い。

「じうわー

テーブルについた俺に出されたのは炭となつたパン一枚と無残にもボロボロと成り果てた丼玉焼き。それともスクランブルエッグ。

「丼玉焼きです」

これを丼玉焼きと看破した俺を誰か褒めてくれ。

尚香も向かい側に座り、黙々と食べ始める。リンゴヨーグルトを。

「おい」

「何か?」

口の中で新鮮なリンゴがシャキシャキと音を立てる。

「俺にもくれ」

力口リーは少ないがそれは仕方ない。こんな発癌性物質の塊よりはだいぶマシだ。

「もうあつません」

そう言つてヨーグルトの容器を逆さにする。

そつか。掛けただけなら出来るのか。覚えておいで。

「兄さん。そろそろ怒りますよ」

やばい。尚香がキレそうだ。
考えるのはここまでとしよう。

「懸念です」

また！？

これはちよつと本当に考えるとしよう。

「では、戸締まりをよろしくお願ひします」

いつの間にか朝食を取り終えた尚香が玄関先で言つ。その後、ドアがバタンと軽快な音を発てた。

「さて、どうようか」

俺の前には黒い板が一枚と、ズタズタの田玉のオヤジが一人。

結局俺は尚香の糧となつた食材達を供養する事とした。

だつてそつだろ？田玉焼きは辛うじて、辛うじて食べられても如何せんパンは無理であつた。焦げている所を少しでも減らそうとナイフで表面を擦る擦る。しかしいくら削れども愛しい狐色は見えてこない。これはおかしいと思い、一思いに割つてみた。

パキンッ！！と軽快な音がなつた。

うん。おかしいね。ここは音も無くしととりと干れる所だからね。そして俺は断面を見て愕然とする。なんと中まで真っ黒。いつたいどんだけ焼いたんだって話だ。十分焼いてもこうはならないだろ？！改めて義妹の力のある意味見直した。

「明日からは俺が作るわ」

そんな事を思いながら家を出た。

これでも家事は得意である。ぐつたらな母に代わり俺達子供が奮闘していたからだ。

まあ、あの母親の事だ。何とも思つて無いはずだが。

俺の家つて言ひと尚香が怒るので、ここでは敢えて俺達の家と表記しておぐ。

本人曰く、

「私の方がこの家に好かれています」らしいです。

何を基準に比べているのやら。俺の愛しい義妹もあの父親の血を継いでいるのがありありと田に浮かぶ。

閑話休題。

「ごめん。話が逸れてしまつたな。

俺達の家から学校までは自転車で十五分程度の距離だ。遠過ぎず近過ぎずのなかなかの立地条件。

今日は尚香がいつもよりも早めに起こしてくれたので時間は十二分ある。いつもはもつとギリギリなのだが、たまには早起きもいいものだ。たまにはね。

俺はガレージに向かい相棒と対面。

しようとしたが、速攻問題発生。パンクしていたのをすっかり忘れていた。許せ相棒。また気が向いたら直してやる。

という事で登校は徒步に決定。

爽やかな朝の風を受けながら、ダラダラと歩き出す。周りを見るといろんな奴がいるもんだ。

おそらく新入生だらう。早速友達を見つけ会話に花を咲かせる奴、まだ見ぬ高校生活に夢を膨らませてる奴、不安なのか肩身が狭そうに暗い奴、そして…

「おはよ。祐一」

「いや、やつて馴れ馴れしく話掛けて来る奴。

「それはちょっと酷くない！？」

紹介しよう。

「いっ……いや、彼女は俺のし……

「し？」

「なあ。知り合い、親友、知らない人。どれがいい？」

「勿論、愛じ

「却下」

彼女の名は石橋君理。れつきとした男性です。

彼女は男のくせに女性の制服を身に纏い、それでいて全く違和感を感じさせない変な人だ。顔も知らなければ女とも見間違えかねない。

皆、気をつけて。

「酷いなあ。もう」

そして人の心を読む妙な特技を会得している。更に言うと女として見ないと泣き出す曲者だ。もう小学校からの付き合いなので慣れてしまつたが、それがまた悲しい。

「石橋先輩っ！…おはよついざこます」

「うん。おはよ」

誰でも気軽に話せる性格のためか、後輩からも好かれているし、学校では知らない人はいない程のアイドル。何故かわからないが告白する人も後を絶たないらしいが、全て丁寧に断っているらしい。それ故に皆が言うには高嶺の花、だそうだ。ファンクラブまであるとか、全く世も末だな。

「相変わらずの不良ぶりだね」

「つるせえ。これは地毛だ」

決して俺は不良ではない。たまに授業をサボるだけだ。

「染めろって言われてるのに」

「誰が染めるか。これは俺の魂だ」

「意味わかんない」

「それはそうだろう。俺だってわからん。
こらつ！――そこ――バカって言わない。」

俺の髪は銀色だ。勿論の事地毛。ただそれだけで教師からは目を付けられる。だから俺は目立つ事を押さえて静かに過ごして来た。勉強もそれなりに出来る。教師は成績さえ良ければ何も言わないからな。

余談になるが、尚香はちゃんと黒髪だ。銀髪は俺と俺の母の神楽奏だけ。

――そんなところよりも……

「おー。離れ」

いつの間にか君理が俺の腕に自分の腕を絡ませている。こいつは昔から隙を見つけると直ぐにイチャついてくる。俺としてはいい迷惑だ。

今の俺達は端から見ればカッフルに見えるだらう。学園切ってのアイドルである君理とある意味有名な平凡学生の俺。どう見ても異質な組み合わせだ。
もつと違う人がいると思つただけど。

「は・な・れ・る・よ・っ！」

「もう。ケチ」

無理矢理振りほどいた際に君理の腰まで届いたふわふわとした黒髪からいい香りがした。

こいつ香水でも付けてるのか？

「ほら。ほけつとしない。遅刻遅刻」

俺の手を引く君理の後ろ姿を見ながら、そんなたわい無いことを考えた。

竹刀で一閃

「すつげえ多いな……」

「うん……」

下駄箱の周辺には生徒達の姿で溢れ返っていた。
いや、蠢いていた。それはもつ湧き出る害虫の如く。

「祐一、それはひどいよ」

「そうか?」

すまんな。虫けら供よ。

何故こんなに生徒達が殺氣だつているのか。

それは今年一年間の学校生活を左右しかねない重大発表、クラス替えがあるからだ!! 男子供は可愛い女子がいるかどうかに運命を掛けているし、女子もそのまた逆。

まあ、俺はどうでもいいに決だ。せめて、ここひとつ離れたいなあ
～なんて……

「やつたねー祐一ーー! ボク達また一緒に

願いは叶うはずもない。

「よかつた」「

やけに嬉しそうな君理は放つておく。構つてはいけないと俺の本能がそう告げる。

「そういうえば、涼子となえかも一緒にだったよ

「げえつ！？またかよ！」

「すまんな。一緒に

後ろから気配を断つて現われたのは桜木涼子。容姿端麗、頭脳明晰、性格微妙のお嬢様。

（微妙つて…）

君理がアイコンタクトで俺を見てくる。

はい、無視！！

冷酷なのが玉に瑕だが俺とは結構親しい関係だ。

去年はクラス委員長で良く注意されたっけー。主な原因は俺の遅刻…

また彼女は世界を股に掛ける桜木財閥の一人娘。なのだが、かなり庶民的でそれを威張つたりもしないし、人望も厚い。

「なえかはどうしたんだ？」

なえかと言うのは俺の向かい側に住む女性の事で、こいつがまた変わり者なんだ。家が剣道の道場で小さい頃からやっていたこともあり、かなり強い。

俺もそこそこの所までいっていたのだが、なんかやる気が起き

なくなり止めてしまつた。

最初は楽しかつたなあ…

ルールさえ守れば竹刀で相手を叩き放題。俺のスタンスはカウント一。相手の出方を一瞬で見切り、躊躇し、隙を打つ。それももう昔の話。

今頃、なえかは朝練だと思うな。青春だねえ〜

「ん?」

不意にメンバー表に違和感を感じた。
変な感じが身体の中を駆け巡る。

「おーい。早く来い」

涼子が手を振り呼んでいる。

涼子は怒ると恐いんだ。滅多な事では怒らないけど。
なので早く行くとしよう。

俺は昨今の事などすっかり忘れ、駆け足で涼子と君理の姿を追つた。

教室に着いた俺は窓側の一番後ろの席に座る。

ここは俺の一番好きな場所。春は暖かい日差しが心地よく、夏は少し暑いがまたそれがいい、秋は草木の紅葉が一望出来、冬はピリリと肌寒い風が吹く。そして何より寝ていても目立たない。これが

重要。

で、決っていたかのように君理が俺の前の席に座る。これもいつもの光景。特に気にする事なく、俺は惰眠を貪る事とする。手を握つて来た君理の頭を軽く小突き、机に俯せた俺は夢の世界へと旅に出了。

「ごめん。今日の朝練キツくてさあー」

竹刀を背負つた童顔の女性の声が響く。女性顔の俺が言えた義理では無いけれど。

「あれ？ 祐、ダウン？」

無視だ。無視。

「天誅つ！！」

ゴスツッ！！ と無防備な後頭部への強烈な一撃。
俺は何も悪いことはして無いぞ。

「大丈夫？ 祐ー」

君理が叩かれた所を撫でてくれる。いい奴だなお前つて。

「それほどでも」

「でも思考を読むのは止めてくれ」

「いや。声に出てるから」

君理のツッコミを無視し叩かれた頭を撫でながら、なえかを睨み付ける。

「おい。喧嘩売つてんのか」

「売つて欲しいの?」

般若…なえかの後ろに般若が見える。それに目が全然笑っていない。
怖ええ…

でもここは男のプライドがある。引く訳には——

「どうするの?」

竹刀を構えたなえかの姿がゆらりと揺れる。

「まあ…落ち着けよ」

許せ俺のプライド。背に腹は代えられないんだ。

「へタレだな」

「へタレだね」

涼子と君理の言葉が痛い。

「なえか。武器は卑怯だろ」

その時なえかがにやりと笑った気がした。
ぞぞぞと悪寒が背中を駆け上がる。

「はい」

渡されたのは竹刀。

「これでフロア」

「冗談じゃない。誰がこんな化け物と戦うか。俺はなえかに剣道で勝つた事が…ある。

でも何でこいつ竹刀を一本も持つてんだ？」

「行くよーーー！」

「よっしゃあーーー来いやああーーー！」

なんだ良き分からん展開だが、勝負事は嫌いではない。やるからには全力で行く。

「ござれ。尋常に勝負うーー

こいつはこんな話しかなんだ。抜けていると云つか、可愛いこと言うか。しかし騙されはいけない。実力は本物だ。

「でりやあああーー！」

なえかの竹刀が迫る。しかも突き。その速度は疾風の如く。

でも、女の子が

「でりやあああーー！」はないでしょ？

「おおうーー？」

そんなのを防具無しで食らつたら死んでしまう。いや、マジで。
俺は全身のバネを駆使し、力一杯竹刀を下から振り上げる。パシ
ンッ！…と軽やかな音が鳴り、なえかの竹刀の軌道が逸れる。

「あつ」

そんなんえかの間抜けな声を聞きながら一閃。

思いつ切り踏み込み胴を打つ。

安心しろ。勿論寸止め。でも久し振りなのに動くもんだな。

「……」

「なえか？」

なえかは外れた突きの姿勢のまま動かない。

「……けた」

「はあ？」

「また負けた…祐に…」

またつてお前…お前の方が強いだろ、今は。
今回はたまたま…つておい…！

「う…いつ…」

なえかの瞳に涙が溜まり始める。

余程ショックだったのだらう。田頃一生懸命練習しているだけあつて何もしていない俺に負けるのは。

俺はどうしていいかわからず、無意識になえかの身体を引き寄せ力強く抱き締めていた。

「うあ……あ……うぐつ……」

なえかの口から嗚咽が漏れる。

登校して来たクラスメイト達がいきなりの光景に驚いている。

「もう泣くなよ。なつ？」

さう言つてなえかの髪を撫でてやる。「こつは昔から頭を撫でられるのが好きなんだ。

「仲いいよねえ」

「うふ

「羨ましいなあ

「うん」

「私もして欲しいなあ

「ボクも」

ちょっとそこの一二人、見てないで手伝ってくれよ。

おわが…（前書き）

更新が遅れ申し訳ありません。

チビチビ頑張つていきますのでよろしくお願ひします

もとか

「落ち着いたか?」

「うん」

なえかが泣きやんだのを確認すると、俺は少し距離を取ろうと後ろに下がった。いくらなんでも学校でいつまでも抱き合っているわけにはいかない。

「ねえ……ちいさなうじ

「おい！ なえか」

「落ち着け！ここは学校だぞ！」
「ダメ？」

まだ赤い目で見上げてくる。所謂、上田遣い。ダメだこりや。

「ああ… あれ、二二十九」

俺は恥ずかしい気持ちを落ち着ける意味を込めて気持ち良さそうにしているなえかの髪を撫でた。すべすべの髪に指が抵抗なく滑り

落ちる。

「あの～。御一人さん？熱々の所申し訳無いが、もうすぐ式が始ま
るのだが」

涼子の言葉で我を取り戻したのか、なえかがわわっ！！ と言つ
て俺から離れる。

『くつね～。なんであいつだけ。コロス』

『おい。止めとけよ。強いぜ。あいつ。ブッコロス』

『やつぱり銀髪か！－銀髪なのか！？グロテスク』

さて、馬鹿共は放つといて体育館に行くとしよう。
最後のやつはなんか怖いが…まあいい。

体育館に行く途中も俺は周りの視線を集めまくった。いや、正確
には俺の周りにいる奴が。

右側にいるなえかは明るい天真爛漫な性格に剣道をしている爽や
かなイメージで人気は高い。童顔で幼い感じなのもだいぶ手伝つて
いる…らしい。左腕にしがみついている君理は前回も話した通り学
校のアイドル。謎だ。後ろから付いてくる涼子は君理と並ぶ高嶺の
花。面倒見が良いので人気が高いのは必然…らしい。

と言つわけで俺の周りには学校のアイドルトップ三が集まっているわけ…

それを狙う野郎共の視線が暑苦しかった。

こいつら誰かと付き合つたりしないのかな?もつたいない。

『学生とは——遊ぶものである——』

おい。校長の第一声がそれか。

『ゴールデンウィークには皆でお泊まり会を——じり——何をする——放さんかっ——まだ話は終わって——』

教員達に連れ戻されるのもいつものこと。教頭の苦労が伺える。だが、生徒からの人気は高い。まあ、当たり前か。アレだからな。でも個人的にはとっても疲れる奴だと言つことは先に言つておこう。

『では代わりに教頭先生の——』

代わりに教頭が話すのもまた然り。

「君理、よろしく」

そう言つて俺は君理に身体を預ける。これももう慣れたもので、少し身体をずらして肩を貸してくれる。うん。ベストポジション。流石だな。

端から見れば恥ずかしい光景だが、先に言おうこいつは男だ。

そんなことは関係無くじつとりとした視線が俺を舐め回す。そんな視線を全身に浴びながら普通に寝た。

『次は新しい先生の紹介です』

マイクから発せられた言葉に体育館が揺れる。

長い銀髪を靡かせ、それでいて美しく整った顔。黒いスーツを身に纏い長身でスレンダーな身体の女性。正しく美人の部類に入るであろう。

その美女はマイクの前に立ち第一声を述べた。

『祐坊ーー！私は、帰つて來たーー！』

体育館が静寂に包まれる。シーンつて。そして、そわそわと会話が始まる。

『誰？祐坊つて』

『オレか』

『違うわ。馬鹿』

うん。馬鹿ばっかりだ。

「ねえ。なえかちゃん。祐坊つて…」

君理がもたれ掛かつて爆睡中の俺に視線を傾ける。なえかも困つた様子で俺を見つめる。

『コラーーーー寝てんなーーー！』

大声で檄が飛ぶ。間違なく俺の方を向いて。

「ほひ、祐一。呼ばれてるよ」

君理がゆさゆさと優しく起しててくれる。うう……眠い。

「終り?」

目覚めたばかりの俺は状況を把握出来ていなかつた。

君理が前方を示す。俺もそれを追う。

視界に入ったのは俺と同じ銀髪の女性。そな……まさか……でも

手からは汗が溢れ、顔からは血が引いて行くのが手に取るよう~~て~~
わかつた。

「あの人は誰だ?」

腕を組んだ涼子が顔面蒼白の俺に聞いて来る。俺は力の限り答えた。

「姉です……」

* * *

「神楽辰美です。このクラスを受け持つ事になりました。祐坊の姉やつります。よろしくお願ひします」

教壇の上からスラリと長い長身を折り曲げ挨拶をする。

当人の俺は机に向かい頭を抱えていた。そして次第に思い出した。クラス表の担任の欄に『神楽辰美』と書いてあったのを。もつと注意して見ておくべきであつたと、今更ながらも後悔していた。

『何歳なんですか?』

『彼氏は?』

『科目は?』

クラスの馬鹿男子から質問が飛ぶ。いいぞ。そのまま引き付ける。

「歳は二十。彼氏はいませんね。科目は化学です。よろしく」

笑顔で親切に答えている。

ああ…怖つ！！

笑顔なのが逆に怖い。

「祐。お姉さんの事教えてよ」

隣りの席からなえかが小声で聞いて来る。俺はちらりと教壇を盗み見てから話掛けた。

「姉さんはな……」

「祐坊? 私語はダメだよね~?」

どす黒いオーラが見えるよ。いるなら助けて下さい神様。

静かにするから、どうか鎮まり賜ええ
……

「 いじら。 “ 神楽。 夕食作れ ” 」

寝て いる俺に向かつて話 し掛けた瞬間、バキンッ！－ と何かが
砕けたような音がした。

あ～～うるわ。 いの声は十中八九、いや、間違なく姉さんだ。

「 “ 早く起きろ ” 」

そしてまたバキンッ！－ と何かが砕ける。

「 はあ …… あ …… 」

姉さんの荒い息が聞こえる。

幾らやつても無駄だ。 俺には効かない。

それにしても凄いな一回も耐えやがった。 俺でも一回田で氣絶す
るのに。

「 どうしたんですか、お姉さんっ！－ 大丈夫ですかー？ 」

横ではいきなりの姉さんの変化に狼狽した尚香が驚きの声を上げ
る。

貴様ら人の部屋で五月蠅いんだよ。

「“早く……起きて……”」

バキンッ！… という音と共に姉さんが気絶し、俺のベッドに倒れ込んで来る。密かに意識を覚醒させていた俺は難なくその細い華奢は身体を受け止めた。

と言うかあれだけ騒がれたら誰でも起きるつて。

「どうしたんですか！？兄さんっ！…何なんですか！…！」

「大丈夫だ。直に目を覚ます」

動搖している尚香をじく自然に宥める。

「いや大丈夫じゃないでしょーーー？あのバキンって何？」

全く面倒くせえ。姉さんが人前で『言霊』なんか使うからだ。ここで俺も使えば万事解決だが、俺は知り合いには極力力を使わないと決めている。この誓いは、いつどこでも常に有効だ。

「尚香。世の中には不思議な出来事が沢山ある。その出来事は自分では理解出来ない力が働いている時が多くある。お前にはその覚悟があるのか？」

嘘は吐いていない。分かりにくく言っているだけだ。
けど、賢い尚香の事だから――

「何が言いたいんですか？」

――一気に核心に迫るはず。

今までのふざけた雰囲気を一新し、鋭い目差しで言へ。

「知つてしまつたら後戻りは出来ないぞ？ それでもいいか？」

「これは俺の優しさでもある。極力尚香には隠しどきたかった。普通の人とは根本的に違う世界だから。

「兄さんは？ 兄さんはどうですか？」

「勿論話したくない」

心からの本心だった。

「だつたら聞きません」

「あらがとう」

「兄さん。もう夕食の時間ですから、お願ひします」

「どうやら毎にチャーハンを作つた後は寝てしまつたようだ。今日は色々あつたから疲れていたんだろう。」

「う……ん」

俺の横で寝ている姉さんが呻き声を上げる。

今度はどんな報せを持って来たのだろうか。俺は押し入れの隠し扉の中から一つの瓶を取り出してから一階に向かつた。

* * *

「何がいい？」

せめてもの償いの意を込めてリクエストを聞く。

「オムライス……」

「はいはい」

尚香の好物はオムライス。卵は半熟でふんわりと、ご飯はパラパラで斑がなく作らないと文句を言われる。俺も料理に妥協はないので今となつては尚香の好きな物は大抵作れる様になつた。
しばらくすると姉さんが頭を搔きながら階段を降りてくる。

「辰美さん大丈夫ですか？」

「ああ……ありがとう」

たわいない普通の会話。俺はこんな会話が大好きだつた。こんな家に住みたいと願つた。俺の実家、神楽家には有り得ないものだつたから。

小さかつたけど覚えてるあれは……監獄だ。

外で遊ぶ事を禁止され、わがままを言う事を禁止され、自由なんていうものは微塵もなかつた。祖父の命は絶対服従。それがあの家の決まり。

俺はあの家と自分に流れる忌まわしい血が大嫌いだ。

はつきり言つて死んでも帰りたくない。

「つて何で姉さんがいるんだよ？ 家は？」

「ちょっと話があつてな」

予想的中。姉さんの話にはろくな物がない。
俺はポケットから先程の瓶を取り出すと、今作っているオムライスに少量混ぜた。

「はい。出来たよ」

俺達の田の前には、美味しそうなホカホカのオムライスが二個。

「はい。 いただきます」

「 いただきます」

大地の恵みに感謝の意を捧げ食べ始める、尚香だけ。俺と姉さんは尚香がオムライスら口に運ぶ様子をじっと見ていた。

「じめんな…」

そう呟いた時には尚香は既に夢の中。

俺が混ぜたのは速効性の睡眠薬。明日の朝には田を覚ますだろうが、今夜はグッスリ眠るはず。

尚香を部屋まで運ぶとコーヒーを一つ入れ、姉さんと向かい合ひよつて座った。

「話つてなんだ？」

この時点で俺は半分以上キレていた。夕食の邪魔をしたのも勿論だが、彼女の前で力を使ったのが大きかった。

俺は気持ちを押さえるためコーヒーを一口、口にした。

「気をつけなさい。神楽が動き始めたわ」

俺はそう、とだけ言つてまたコーヒーを飲んだ。

「大丈夫？ 貴方は神楽の嫡流なのよ？」

いきなりだがこの世の法則を紹介する。

この世には二種類の人間がいる。まず尚香のような一般人と、姉さんや俺のように『力』を持つ人間。人は力を持つ俺らのことを異能と呼び、避けたり、嫌つたりする。それは普通の人間が大多数であるためもあり、ただ単に異能の力が恐いのもある。

そこでもう一つ。

異能にも二つの部類がある。血筋と突然種だ。

血筋に当たる神楽家は代々『言霊』という力を受け継いで来た。昔の人は言つていた。想いの籠つた言葉には力が宿ると。それを表現したのが俺たち神楽の人間。

言霊の力は大雑把に言えば、相手に命令出来る力。だが、それも決して万能ではない。

言霊の力は精神力。この精神力は産まれた瞬間から決つていて、増えることも減りもしない。相手の精神力が自分より小さければ小さい程、相手に術を掛けやすくなる。

しかし逆に自分より大きい力を持つ相手に絶対と言つていいほど
言靈は掛からない。

俺の方が姉さんより力が強いので、姉さんの力は俺には効かない。
力には同等の代価がいる。言靈の場合は失敗した際に非常に激しい頭痛を伴う。この痛さは尋常ではなく、大抵の人は一回、姉さんでも三回で気を失う。

そして突然種。これはその名の通り突然力が発現する。この力は無作為で強大なものから貧弱なものまで多種多様。中にはとんでもないぶつ飛んだやつもあるらしい。

その発現の確率は三十分の一。つまり一つのクラスにも一人や二人いる計算になる。

この力の代償は高く力の強さにもよるが、使うと極度の疲労感に襲われたり、気絶したり、極端な事を言つと死んでしまうことも十分考えられる。

俺も当事者の一人なのでこのことはよく分かっている。

要するに俺は神楽の嫡流でありながら、突然種でもある稀有な存在。

「」で少し話を戻そう。

血筋の力はそのパターンに填れば誰でも力を受け継ぐ。でも逆に捉えると、そのパターンに填らなければ力は受け継がれない。

この世の法則に例外は認められない。

神楽家の力の法則、それは『第一子の子供』にしか子孫に力を継承できない。

本家の次女である母、奏の子である神楽辰美と神楽祐一。この二

人は法則にしたがい力を使える。だが、姉さんの子供は第一二子の子ではないので力を受け継ぐことなく一般人となる。

今の神楽家は神楽奏の第一二子である俺、神楽祐一しか異能の力を伝える術を持つていらない。

「身体はまだ大丈夫なの？」

「ああ。まだ、な……」

テーブルの下で軽く手を開閉する。少し違和感を感じるが、まだ大丈夫。まだ――

そして神楽家が事を急ぐもう一つの理由。

それは嫡流の短命にある。代々嫡流は短命で三十歳から身体が悲鳴をあげ始め、四十まで生きるのはそうはない。奏ももう三十過ぎ。そろそろ身体の調子がおかしくなつてくる頃だ。

俺は十七、多く見積もつて後十数年。神楽家が続くには俺の子供が必要不可欠。母さんも若くして俺らを産んでいる。そう考えて、今俺は明らかに神楽家の法則から逸脱していた。

「姉さんは誰の味方なの？」

「勿論祐一よ。じゃなきやこんな話しない」

この言葉は嘘か誠か。

姉さんはにやりと不気味に笑った。

「種馬に成りたくなかったら氣をつけて」

捩じられた法則。

人を物として扱い使い捨てる。

そんな世界が嫌で母さんは家を出た。俺も大いに賛同する。

最後に――

この世の最大の法則。

異能と知られた人間は表では生きていけない。国際法で異能の力の使用は禁止されている。
それはまた日本も然り。

サジエスジョン

――夢を見た。

人は寝ると夢を見る。

他愛ない夢、幻想的な夢、悲しい夢、楽しい夢、恐い夢…
だが殆どの場合、人は見た夢を覚えていない。それは脳が記憶を
整理するためでもあるから。脳は自分を守るため夢を消去している。

しかし今回は違つた。今もはつきり鮮明に思い出せる。

そう昨日の夢は――

私はとある部屋の一室にいた。ここがどこかはわからない。こんなところに来た記憶もない。

天井には豪華なシャンデリアが神々しく輝き、部屋の真ん中には高そうな革製のソファーが綺麗な硝子のテーブルを口の字に囲む。テーブルの上にはシャンパンが置かれすぐ側には小さな可愛いワイントセラーが鎮座する。

なんて優雅な空間なんだろう。

ソファーには私のよく知る人々。左からなえかさん、君理先輩、涼子先輩と私。学園のアイドルが勢揃い。思わず畏縮してしまう。私も含めて皆楽しく談笑している。でも何故か顔色が良くない。血の気が失せた様な蒼白な表情。

そこで私は気が付いた。

兄さんがいないという事に。

このメンバーは集まっているのに兄さんがいなのはおかしかった。兄さんがいるからこのメンバーが集まると私は感じていた。そもそも私が兄さん抜きで先輩達と共にいることはあまりないから。

私はグルッと一通り部屋を見渡す。

その時後方から「ゴンッ！！」と鈍い音がした。硬い物同士が勢い良くなつたような。

不意に後ろに振り返り——

* * *

気がつくとベッドの上だった。

パジャマは寝汗でびっしょり濡れていて気持ち悪い。それでいて頭痛が酷かった。昨夜の記憶も曖昧になつていて。確かオムライスを食べた所までは覚えているのだが……

その後はわからない。

酷い頭痛の痛みを堪え、夢の細部を思い出す。
最後に何か紅いものを見た気がした。

「おひ。御田覚めか?」

私はむつ、と嫌そうな顔をしたのだろう。

不覚ながら兄さんのつらえた姿に少し癒されてしまった。

「どうした? 顔色が悪いぞ?」

兄さんはいつも優しい。いつも私を気遣ってくれる。

「どれ?」

兄さんは私の頭を軽く撫でるよつて手を置く。
私の調子が悪くなると必ず「ひやつて撫でてくれる。その手は暖
かくて、柔らかくて、優しくて。私は心がほわっと温かくなるのを
感じる。

「“大丈夫だよ尚香。すぐに良くなるから”」

すると今まで頭に残っていた鈍痛が嘘のようにスウッと消えた。

最近こんな夢をよく見るようになった。その度に兄さんが撫でて
くれるからいいのだけれど。

ただ――

ただ、嫌な胸騒ぎがして止まなかつた――

優雅な休日

刻は四月末。

明日からは休み。だがそれは普通の休みとは違った。
たまたま祝日が重なることにより、一週間が丸々休みのような連休になる。日々の退屈な日常とは掛け離れた輝かしい時間。

人はこう呼ぶ。

『ゴールデンウィーク』と。

俺の周りの生徒たちも明日からの連休のスケジュールを組むのに余念がない。

彼女とデートに行く者、友達と遊ぶ者……
しかし俺は違う。俺は何の予定も入れていらない。
家で惰眠の限りを貪る……
これこそが「ゴールデンウィーク」を過ごす若者の正しき姿だと思つから。

「なあなあ。明後日から旅行に行かないか？」

そう。旅行になんぞ絶対に行かない。

「いいよお～」

「うん。ボクも」

なえかも君理も涼子の誘いに一つ返事を返す。

「神楽はどうだ？」

「ん？俺はバス」

三人が露骨に嫌そうな顔をする。『つわ～空氣読めねえよ。二つ』みたいな眼で見て来る。
何だかとんでもなく心外だ。

「なんでダメなんだ？」

「ここで家でゆっくりしたいとは言えない。なるほど納得、といふ理由を言わないと。」

「ほひ。金が無くて

俺は戯けて答えた。

すると涼子は勝ち誇るみで笑つた。

「心配するな。私が持つ」

「うだつた――！」

涼子は桜木財閥の令嬢なのだ。いつも庶民派なのでついつい忘れがちだが、時々とんでもない金持ち発言をする。

「「おお～～～～！」

なえかと君理の感嘆の声を涼子は気持ち良さそうに聞いていた。

俺はいそいそと次の言い訳を考える。

「でも……姉さんの面倒を……」

「先生は実家に帰ると言つっていたが？」

これも俺が動きたくない理由の一つだつたりする。神楽の家に呼ばれるところくな事にならない。いや、ならないことがない。

だから俺は家で静かにしていたいのだ。

「他には？」

涼子はもう何でも来いつ！！と言つた表情でこっちを見て来る。対して俺は冷汗ダラダラ、瞳も泳ぎまくりの拳動不審気味。なえかと君理の行こうよー、という連呼もつざい。俺は、はつと思い出したかのように呟んだ。

「そうだ……尚香……尚香を一人にはできないっ……！」

あまりに大声を言つたためか、クラスが静まり返った。

『何！？ 神楽君ってシスコン？』

『私はいいけどね。カッコいいし』

『うん。私も全然大丈夫』

『私はむしろそういう方が……』

女子たちの戯言が聞こえる。

「人の少女の意外な一面が垣間見れたが、なんか嬉しくない……

「じゃあ、尚香ちゃんも行くわ」

「ええーー？」

「問題ない。元々そのつもりだ

さいですか。

では早速と言わんばかりに涼子が俺の腕を掴んだ。

「おこーーー！」行くんだ？

「尚香ちやんのところだが？」

今からーーー？ マジでーーー？

「早くしやーーー！」

君理となえかも俺の背中を押していく。

阿吽の呼吸つて言うのかな？ いつもこのふたを……

で、なんか尚香のクラスの前にまで来てしまった。

* * *

ガラガラとクラスの扉を開けたことで皆の視線が集まる。

「あのぉ……神楽さんいますかあ？」

なえかが近くにいた男子生徒に話し掛ける。

少年は

「はいい～」といやけた顔で尚香の元へ。
なんか胸糞悪い。しめてやるつ。

「ダメだよ」

君理に諭されてしまつた。

「なんでわかつた」

「顔に出でる」

俺は慌てて無表情に戻した。横では君理がくっしりと笑つている。

「兄ちゃん！？」

俺はやあと軽く手を上げる。

「尚香ちやん。ものは相談なんだが……」

重々しい空気を涼子が作り出す。ここにこなのは上手いからな
あ。じくつと首が息を呑んだ。

「旅行に行かないか？」

尚香はえつ？ という顔をした。
可愛いいい……つて重症だな。俺……

「兄さんは？」

「いや……俺はだな……」

「勿論だ」

俺を無視して力強く答える。

「では、喜んで」

尚香は俺に二コツと微笑み掛けてくる。
この笑みに何人の男が轟沈したことか——
ってマジでか尚香！？行くのか！？

「行き先はどこですか？」

「向こうだ」

ビシッ！！ と涼子が明後日の方を指差した。
こっちの方角は……西かな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0397e/>

いつまでも続く、俺の日常

2010年10月29日13時30分発行